



# モーツァルト室内管弦楽団 第132回定期演奏会

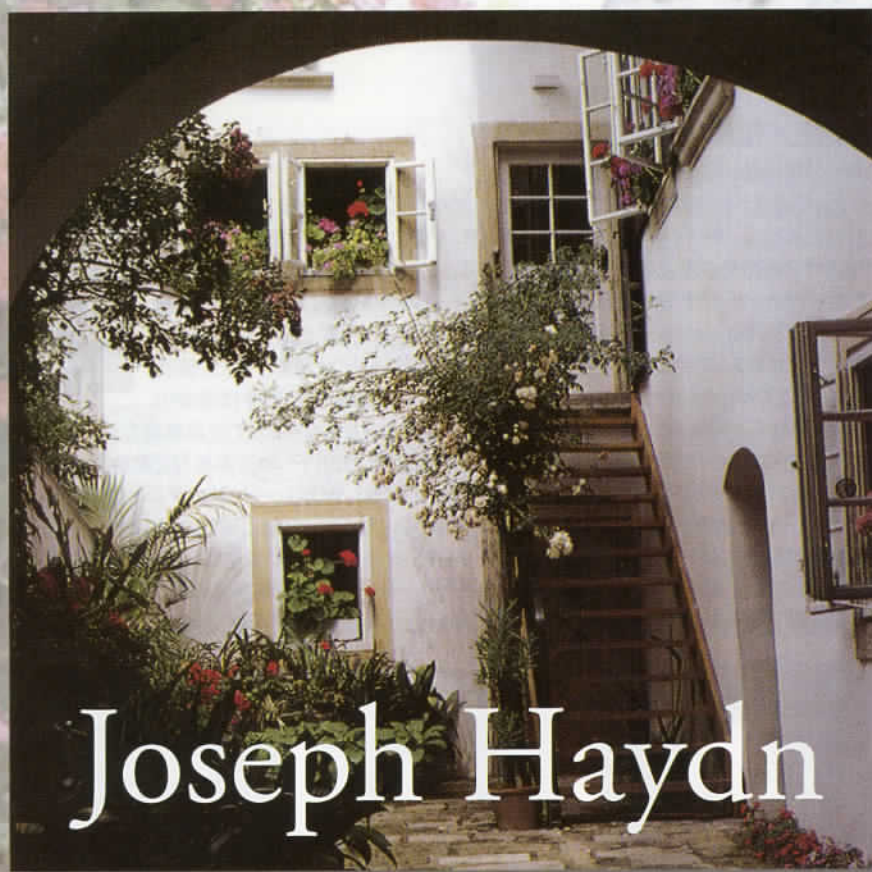
〈楽団創立40周年記念シリーズ〉第6回  
〈2009年 没後200年 ハイドン・シリーズ〉第10回

ハイドン最後の超大作

## オラトリオ《四季》

(日本語字幕付)

„Die Jahreszeiten / The Seasons“



アイゼンシュタットのハイドン・ハウス

# Joseph Haydn

ハンネ：木村能里子(ソプラノ)

ルーカス：西垣 俊朗(テノール)

シモン：田中 勉(バリトン)

モーツァルト記念合唱団(合唱指揮:益子 務)

指揮：門 良一

2009 **12/13** 2:00pm開演  
(日) (1:30pm開場)

いずみホール

JR環状線「大阪城公園」駅から3分、「京橋」駅から7分、  
地下鉄長堀鶴見緑地線「大阪ビジネスパーク」駅から5分。  
有料駐車場完備

入場料：一般 **¥5,000**(指定席) / 学生 **¥2,500**(当日限定数発売)

\*小学生よりご入場いただけます。\*前売一般券完売の場合、学生券の販売はありません。





# 『ハイドンを忘れてもらっては困ります』

モーツァルトはその生誕250年を世界中が祝った。ベートーヴェンは不動の人気を誇っている。[ウィーン古典派]と呼ばれる3巨匠のうちで筆頭であるべきハイドンは、この二人の後塵を拝しているのが現状である。だが、もしハイドンがいなければ、モーツァルトやベートーヴェンの交響曲も弦楽四重奏曲もこの世に存在しなかつたらう。クラシック音楽の基本スタイルはハイドンによって創造され確立されたのである。また、ハイドンの音楽の持つ健康さとユーモア、そして品格ある秩序感は、今の世に最も必要とされるものであろう。モーツァルト室内管弦楽団はハイドン復興をめざし、2009年の没後200年に向けて全10回の〈ハイドン・シリーズ〉を行ってきたが、今回その最終回を迎える。

『ハイドンを忘れてもらっては困ります』

これは、フランス映画「ハンカチのご用意を」の中で、主人公の少年がモーツァルトばかり聴かせる音楽教師に対して抗議することばである(川本三郎著「東京つれづれ草」より引用)。

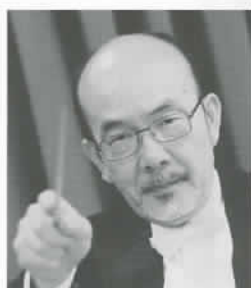
## ハイドン最後の、そして最高の傑作《四季》

ハイドンは60歳前後に行った2度にわたるロンドンへの演奏旅行において《メサイア》をはじめとするヘンデルの作品に接し、オラトリオ作曲への意欲を大いに掻き立てられた。その結果生まれたのが《天地創造》と《四季》の2大オラトリオである。69歳のハイドンが書いた《四季》は内容、規模ともに《天地創造》をうまわり、文字通りハイドン最後の超大作となった。《四季》こそは音楽史上最高の声楽とオーケストラのための作品であり、これに匹敵するものはモーツァルトのいくつかのオペラしかない。モーツァルト室内管弦楽団は没後200年記念〈ハイドン・シリーズ〉の中で2007年に《四季》を演奏したが、好評に応え再度この作品を取り上げシリーズ最後を飾るものである。

### モーツァルト室内管弦楽団／指揮・門 良一

Mozart-Kammerorchester / Ryoichi Kado, Dirigent

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、39年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。'91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで90年からは大阪いずみホールを本拠として定期演奏会を、また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に16回を数えている。海外では'88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョア・ピリス('85、'87年)、シブリアン・カツリス('93、'94年)、ペーター・ダム('83、'86、'88、'98、'00年)、ウィーンフィル木管アンサンブル('86年)、ライナー・キュッヒル('90年)らとの名協演はいまも語り草となっている。'91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲などで活発に協演するほか、'93年には堺シティオペラとの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。'06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。—「すばらしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。2007年より(没後200年記念ハイドン・シリーズ)を、2009年からは(創立40周年シリーズ)を始めている。



指揮：門 良一



ハanne：木村能里子(ソプラノ)



ルーカス：西垣 俊朗(テノール)



シモン：田中 勉(ホルン)



合唱指揮：益子 務

### モーツァルト記念合唱団／合唱指揮・益子 務

Mozart Choral Ensemble / Tsutomu Masuko, Chor-Dirigent

「本番のステージで柔軟に音楽をすることのできるプロフェッショナルなコーラスがほしい」という、モーツァルト室内管弦楽団の要望を受け、特別に編成された合唱団。女声は堺シティオペラの選抜メンバー(若手プロ)を中心に、男声は合唱王国関西の著名合唱団の指揮者、パートリーダー・クラスに参加を要請、1991年7月末に発足し、益子 務氏の指揮のもとに練習を開始した。同年12月モーツァルト室内管弦楽団のモーツァルト没後200年記念第48回定期演奏会で「レクイエム」を協演、それ以後、ミサ、オラトリオ、オペラなどで毎年協演し、中でもモーツァルト「ハ短調大ミサ」、「救われたベトゥーリア」、「イドメネオ」、ハイドン「天地創造」、「四季」、ヘンデル「メサイア」、ベルリオーズ「キリストの幼時」などは絶賛を浴びた。93年には初の単独自主公演としてジャニーヌ・ワグナー氏を客演指揮者に迎え〈ロジェ・ワグナー・メモリアルコンサート〉を開催、大好評を得た。98年、00年の2回、ベルギー・フランドル政府の招きにより文化交流使節としてベルギー演奏旅行を行い、大成功を取めた。00年、創立10周年記念としてCD「ロシーニ：小荘厳ミサ」をリリース。

